

『わたしのそばでできいていて』

リサ・パップ／作 菊田 まりこ／訳 (WAVE出版)

- ☑人前だと、緊張してうまく話せない。
 - ☑人前だと、うまく読めない。
 - ☑国語の授業が嫌いだ。
 - ☑そもそも字を読むことが好きではない。
- 1つでもチェックがついた方は、「わかる!!」と強く共感できる作品です。

読むことが苦手なマディは図書館で出会った犬のボニーに本を読んであげることになります。音読の練習を通したボニーとの関係性、マディの成長に、読後、優しい気持ちになると共に、教育の在り方について改めて考えさせられます。

この物語に登場する犬のボニーは一般的にはセラピードッグと呼ばれており、安らぎや癒しを与えるように訓練された犬たちのことで、私自身、この本を読んで調べ、その存在を知りました。海外の図書館で実際に活躍しているそうです。日本では彼らに読み聞かせをする図書館イベントの開催、福祉施設での触れ合いなど、接する環境が少しずつ展開されているようです。教育、福祉・介護に様々な立場で携わる方、そして、お子さんから大人の方まで多くの方に手に取っていただきたい作品です。

『世界の美しい書店』

WE LOVE BOOKSTORE』

今井栄一／著（宝島社）

私の見ていて楽しい風景の一つ、それは沢山の本が並んでいる様子です。書店や図書館のように沢山の本が並んでいるのを見ると、わくわくします。何が書かれているのか、綺麗な写真はあるのかと頁をパラパラと開いて、自分のお気に入りの本を探す時間はとても楽しい一時です。実際に目でみなくても、写真を通して本が沢山並んでいる様子は見ていてもあきません。そしてこの本では世界の美しい書店を写真とともに、その書店の歴史や街の様子、作者の旅で培われた知識が書かれており、読んでいるとその書店に愛着が湧いてきます。乾燥して暑く雨のあまり降らない土地ならではの屋外書店には、本は焼けないのだろうか心配になったり、かつて劇場や教会の建物を利用した書店には、建築の美しさと本棚の調和にうっとりしたり。それぞれの本屋ならではの魅力が書かれていて、書店や図書館好き、はたまた、私のように本が並んでいる様子が大好きな人にお薦めの1冊です。

『中をそうぞうしてみよ』

佐藤雅彦＋ユーフラテス／作（福音館書店）

出題：身の周りにあるもの、その「中」をそうぞうしてみよ！

本書には椅子や針山、包丁などの写真が登場する。その「中」をそうぞうするとは？

著者はNHK教育テレビ「ピタゴラスイッチ」監修でおなじみ、佐藤雅彦氏とその研究室からなるクリエイティブグループ、ユーフラテス。『考え方の整頓』や『プチ哲学』でも見られた、佐藤氏の物事に対する考え方に一石を投じるテイストは本書でも発揮されている。

エックス線で透けて見える対象の「中」の写真に、大人が読むとあまり驚きはないが、子どもにとっては新鮮に映るだろう。中はどうなっているのだろうと想像する心は、探求心や洞察力などが育ち、心を豊かにしてくれる。是非大人と一緒にああじゃないかこうじゃないかとワイワイおしゃべりしながら読んでほしい科学絵本。普段おはなし絵本しか読まない子どもにもお薦めしたい。

『レッツゴー！ばーさん！』

平安寿子/著（筑摩書房）

普通の人々の日常を独特のユーモアを交えて描いた作品を多く手掛ける平安寿子の作品。この作品も「老い」をテーマにこれまたユーモアたっぷりに描いている。主人公、東西文子60歳は素敵なばーさんを目指し日々精進している。白髪薄毛問題、老眼問題、歯問題、物忘れ問題、ケガしやすい問題そして老親問題と若い頃気にも留めなかったことが続出するが、自分に合った方法で淡々と解決納得していく文子。老いることは嫌なことばかりではない、楽しく老いることが素敵なばーさんへとなる秘訣なのである。「金持ちだろうが貧乏人だろうが老いは平等」など沢山の文子語録も読んでいて心地よく楽しい。本書は、30代以上のまだ楽しく老いることを知らない大人の女性に向けたばーさん取り扱い説明書と言ったところである。